

ある。このことで霞ヶ浦は急激に汚れ、魚も住まず、水も飲めなくなる危険にさらされることになった。そのよりなわけで、いま、進行している「水ガメ」化とは、すでに始まっている「水ガメ」化の永久コンクリート工事なのである。

さて、霞ヶ浦の一大ダム化を推進している県や国は、ストレートに「水ガメ」化とはいわずに「霞ヶ浦総合開発」と称呼しているところに、注意を払う必要がある。

だが、私たちは「開発」などの美名にまどわされてはならない。開発は、ほんらい、地域社会や住民のためのものでなければならぬが、「霞ヶ浦総合開発」はどうか、なるほど、当局は、「霞ヶ浦総合開発」の目的は、東台湾の平均海面より〇・八四メートル低い高さを原点（これをY・P、と呼ぶのだそうだ）にして、そこから三メートルの潮岸堤を築くことで湖周辺の洪水や湛水の被害をなくすことにあるのだと説明している。すなわち、「霞ヶ浦総合開発」は治水が優先で、利用はその手段にすぎないというのである。

そこで、しばしば引き合いに出されるのが、例の記録

的な被害をこうむった昭和十三年六、七月と昭和十六年七月の二大洪水で、治水計画の基本方針によると、この二つの洪水を基準にして、最高水位をY・P・二・八五メートル以下におさえて水の調整をはかるのだという。

これだと、水を調節するさいの余り水を工業用水や上水道用水に利用するようになれる。そんなことで水の需要に追いつけるわけではない。なにしろ鹿島に進出した住友金属鹿島製鉄所だけで毎日八〇万トン余の工業用水を霞ヶ浦・北浦から取水しているのである。なんとしても霞ヶ浦の「水ガメ」化が必要なわけはここにある。

霞ヶ浦から利根川に流れる一年間の水量は、霞ヶ浦の貯水量の約二倍の一四億トンといわれているが、鹿島進出企業の霞ヶ浦・北浦からの取水計画は、昭和五十年には、日量一三四万トン、五十五年には二〇〇万トンという膨大な量である。日量二〇〇万トンといえば年間七億三〇〇〇万トンであるから、鹿島臨海工業地帯だけで、年間利用可能水量の約半分を使うことになる。

「水ガメ」化計画によると、Y・P・一・三メートルからY・P・二・八五メートルまでの水量を利用するのだ